

共生社会の実現に向けた身体教育再考： 障害のある子どもを含めたチアダンス指導を通じて

常行 泰子¹⁾, 坂井 香代²⁾

1) 高知大学教育学部

2) 高知大学教育学部附属特別支援学校

Reconsidering Physical Education for the Realization of a Symbiotic Society : Through Dance Instruction for Cheerleading Including Children with Disabilities

TSUNEYUKI Yasuko¹⁾, SAKAI Kayo²⁾

1) Faculty of Education, Kochi University

2) Special Support School Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University
Faculty of Education

Abstract

The purpose of this study was to analyze the dance instruction of students including children with intellectual disabilities and reconsider the physical education of university physical education for the realization of a symbiotic society. As a result of the qualitative data from the students, teachers and students of the special education school, the results were as follows: 1) The importance of "nonverbal communication" in teaching dance was suggested among students, and discourses touching on the relationship of trust with children and the formation of rapport were presented in addition to technical skills. 2) Awareness of metacognition and an objective and bird's-eye view were seen in dance instruction, suggesting the importance of cross-curricular learning. 3) From the evaluation by the teachers belonging to special education school, certain educational results were shown, and at the same time, issues such as guidance, advance preparation, and atmosphere in the class were presented. Inclusive education for the formation of a symbiotic society can be expected to be effective as an organization of children with disabilities and children without disabilities, as well as students and teachers who want to become teachers, in addition to cross-curricular learning.

Keywords : Dance instruction, Intellectual disabilities, Special needs education
Health support, Practical class in physical education,

I. はじめに

障害者が、積極的に社会参加・貢献していくことができる共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システムの理念に基づいた特別支援教育の重要性が以前にも増している。インクルーシブ教育システムは、障害の有無に関わらず人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の共生社会(文部科学省, 2012)を目指しているが、基本的な方向性としては、「障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶこと」とされる。そして、その場合には、それぞれの子どもが授業内容を理解して学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか本質的な視点を問う環境整備が必要であると考えられている(文部科学省, 2012)。

しかしながら、障害を持つ子どもの教育に携わる教員自身については、現在特別支援に直接的に関わる一部の教員を除いて、障害に関する知識・理解、さらに実践的な教育活動の経験が十分とは言えない現状がある。特別支援学校を対象とした調査において、特別支援学校教諭等免許状保有率は 79.8% (2018) と低く、新規採用者の 76.1% が免許未取得の状態で特別支援教育に携わっている(文部科学省, 2019)。特に教育格差が指摘される地方の教育環境においては、地域社会のニーズを踏まえながら、特別支援学校共有等免許状取得率の向上と共に、インクルーシブ教育における質の高い人材育成が、共生社会実現に向けて一層求められよう。大学改革を踏まえた教育の質保証には、障害のある子どもと障害のない子ども、さらに教職を志望する学生の教育研究を各関連機関が連携・協働して推進することが望ましい。川嶋(2008)が示唆する「組織の教育活動」とは、インクルーシブ教育とそのための教員養成においても有用なものであり、大学教育の質保証を担保する上で必要不可欠となる。

ところで、障害者への理解を促進する起爆剤として、東京オリンピック・パラリンピック 2020 が注目されていた(スポーツ庁, 2016)。今回のパラリンピックでは、「みる」スポーツのみならず、「ささえる」スポーツボランティアを中心とした活動に期待が寄せられ、新型コロナウイルス感染拡大が収まらない中、多数の学生ボランティアが参画した視覚障害者との交流について報道がなされる等、注目を集めた(NHK Web, 2021)。スポーツ庁は、「する」「みる」「ささえる」の3つの視点から運動やスポーツ参画人口の拡大を目指し、そのための人材育成・場の充実に関する施策をスポーツ基本計画に基づき推進しているが(スポーツ庁, 2017)、スポーツ実施・観戦以外にボランティアやサポーターとして「ささえる」役割を学習する教育の機会は、共生社会における大学体育の身体教育、さらに教員養成における教育意義が高いと考えられる。特別支援教育を主専攻

とする教員志望学生はカリキュラムにおいて障害や配慮事項に関する充実した教育内容・機会が組み込まれているものの、それ以外の教員志望学生には相対的に障害に対する知識・理解の習得、さらに実践的な探求学習を伴う教育機会は極めて少ない現状がある。大学体育における今後の身体教育の在り方について検討することは、授業改善や今後のカリキュラム構築に有益な情報をもたらす。共生社会の実現に向けて、大学体育における身体教育の意義を再考することは意義が高く、組織的な教育機関の連携協働に基づく、戦略的かつ中長期的な視点でなされる教育の取り組みが期待されよう。

知的障害の特別支援教育において担当教師が児童生徒の多様な実態を把握し、児童・生徒が安心して関わり合い、協力し合い関係性を育み、自らの力を発揮して学び続ける(自ら学ぶ)姿を実現するよう、学級づくり・授業づくりに取り組む重要性が指摘されている(山口ら, 2019)。高知大学教育学部附属特別支援学校高等部では、身体づくりの教育目標として、「(1) スポーツなどの体を動かす楽しみを作り、これまで培ってきた身体運動の力を確かなものにし、卒業後の職場や家庭生活に活かせる力を養う。(2) これまで培ってきた感情の平静を自ら保つ力や支援を求める力を確かなものにし、卒業後の職場や家庭生活に活かせる力を養う」といった2点が掲げられている(高知大学教育学部附属特別支援学校, 2021)。この2つの教育目標は、高等部という発達段階の特性に鑑み、卒業後の社会生活との接続までを射程に置いたものとなっている。特別支援学校における学校体育から生涯体育へと繋がる教育プログラムの実践・検証は社会的意義が高く、障害を持つ児童・生徒の健康づくりに多大な貢献をするものと期待できる。

以上のことから、本研究は、高知大学教育学部附属特別支援学校高等部と連携し、障害のある子どもの健康づくりに資する身体教育プログラムを教材として、学生が「ささえる」指導者としての役割を学習する機会を設けた。多様な身体教育プログラムの中でもシンプルな振付かつ体力向上の効果が狙える有用な運動の1つにチアダンスがあり、肥満傾向が指摘される知的障害のある児童・生徒にも適した種目であると考えられる。よって本研究では、知的障害のある子どもを含めた学生のチアダンスに関する指導実践について多面的視座から分析・検証し、共生社会の実現に向けた大学体育の身体教育について再考することを目的とした。

II. 研究方法

本研究は、Creswell(2003)が提唱するミックス法(mixed methods)を採用し、下記①②からなるフロー(図1)か



図1 指導実践のフロー

ら構成、各フェーズにおいて質的データを収集し、トライアンギュレーションを実施した。

- ① 身体教育の領域に設置されている「初等体育Ⅱ」を通じて、障害のある子どもや初心者を含めたダンス・表現の実技習得・指導を実践し、指導者役（以下、IRとする）を選抜する。
- ② 上記①で創作したダンス・表現のチアダンスプログラムを、特別支援学校高等部と連携した合同体育の授業において指導実践する。（表1）

（1）授業対象者

2021年度教育学部で開設される体育実技・指導法に関する「初等体育Ⅱ」履修者のうちダンス・表現領域（Bコース）を選出した教育学部1年生22名（男子9名、女子13名）であった。発表と指導の評価を踏まえてIRに選抜された学生は4名（男子2名、女子2名）であった。

（2）授業実施の期間と形態

- ① 2020年10月26日（月）～2020年11月30日（月）
大学での実技・指導実践6コマ
- ② 2020年12月4日（金）
特別支援学校との合同体育1コマ

（3）研究対象者

高知大学教育学部附属特別支援学校に在籍し、知的障害・自閉症等の障害がある高等部1～3年生23名を対象とした。内訳は下記のとおりであった。1年生8名（男子5名・女子3名）、2年生8名（男子6名・女子2名）、3年生7名（男子4名・女子3名）

（4）研究体制

授業担当者：ダンス指導経験20年以上の大学保健体育教育コース教員1名
 授業補助者：特別支援学校教員高等部教員7名（うち保健体育担当教員2名含む）

また、授業のオブザーバーとして大学院生1名（1年女子）も参加した。

（5）データ収集・分析

大学での授業終了後に、学生へ指導実践に関するレポー

トを提出させた。また、特別支援学校生徒・教員を対象とした自由記述式の質問紙調査を行った。さらに指導実践を行ったIRを対象に、フォーカスグループインタビュー（オブザーバーの大学院生を含む）を行った。トライアンギュレーションを行い、すべての質的データについて分析・検証した。

（6）倫理的配慮

特別支援学校の依頼に基づき、校長の許可を得て実施した。質問紙調査は個人が特定できないよう無記名とした。

Ⅲ. 結果

（1）初等体育Ⅱの概要

初等体育Ⅱは、高知大学教育学部の専門科目として開設されており、小学校体育科で実施されている内容について、2つの領域（5領域）について実技を通して、小学校体育の指導法を学ぶことを目的としている。具体的な内容は、ボール運動・陸上運動・器械運動・ゲーム・表現運動から構成される。

【授業到達目標】

- ・体育科の学習内容について知り（知識）、基本的技能（技能）ができる
- ・体育科で実施される内容の指導法について、実践を通して理解する

【授業内容】

- 1回目：オリエンテーション、体ほぐし
- 2回目：表現運動、ミニ創作・発表、フォークダンスⅠ
- 3回目：表現運動、創作・発表、フォークダンスⅡ
- 4回目：リズムダンス、ミニ創作・発表
- 5回目：リズムダンスダンス、創作・発表、指導実践
- 6回目：リズムダンス、創作・発表、IR選抜

*IRについては、1～4回目の取り組み状況と5・6回目で創作したチアダンスプログラム内容に関する発表及び指導を踏まえて「安全性・効果・楽しさ」の項目を授業担当者が評価し、最も評価が高かったグループのメンバーを選抜した。

表1 特別支援学校の合同体育における学習活動・内容について

	学習活動・内容	指導上の留意点等
事前 (準備)	A大学教育学部における専門授業「初等体育Ⅱ」(全6回)におけるダンス創作・指導実践	学生はグループごとにダンス創作・発表・指導実践を行い、最も技能スキルが高かったグループを抽出。支援学校生徒は、前回の合同体育(2020年10月23日)で使用したフィットネスボールを持参。
導入 (8分)	1. 導入 挨拶(自己紹介)、授業及びポンポン(使用ツール)の説明、授業目標・概要の説明及び確認 ・「呼び名は?」「体温アップで風邪ひきにくくなるよね」 ・フィットネスボールでのウォーミングアップ(天井に向かって投球、ボールでハイタッチ、コロナ式挨拶)、カラダじゃんけん、ストレッチ、手拍子リズム遊び)	ポンポンの取り扱い方法をデモンストレーション。 生徒のレディネス(準備性)と楽しさを重視したウォーミングアップを実施。 前回の授業と同様に、個別運動と直接接触せずに他者と関わることができる動きを導入する。
展開 (35分)	2. グループ分け 3. 振付の紹介 ・学部生全員による振付のデモンストレーションを実施(音楽:Hand Clap) ・支援学校生徒と教員が学生の動きをまねして動く 4. グループ練習 ・学部生1名が支援学校生徒5名を担当し、振り写しを実施。 ・一通り振り写しが終わった段階で、学部生は別のグループを指導し、ローテーションで対応する。	学年ごとにグループ分けを行う。 音楽と一緒に動きの習得を行う。生徒が無理すぎないよう指示する。 口頭での指示だけでなく、ビジュアルキューを意識して指導する。また必要に応じて、支援学校教員が補助する。
発表 (12分)	5. グループごとの発表 6. ふりかえり ・学部生から生徒へ印象に残った点や気づいた点を口頭で伝える。終了の挨拶	発表するグループ以外は座って鑑賞 全員集合
事後	生徒と支援学校教員による自由記述、学部生を対象としたフォーカスグループインタビュー実施	授業内容・展開についての意見交換

(2) 初等体育Ⅱの指導実践と振り返り

初等体育Ⅱでは、ダンス・表現領域を履修する学生全員が子どもを想定したチアダンスをグループごとに創作・発表し、IRとして他の学生を指導する内容となっている。表現の技法やコリオグラフィー(振付)はシンプルな基本動作と日常における生活動作及びパントマイムを用いた動きを中心に伝達し、ダンス・表現が未経験の学生も実践可能な内容及び展開になっている。指導実践後、課題レポートに気づきと振り返りを記述させた。(一部抜粋)

人に指導して感じたことは、自分がダンスを踊れる事と人に教えることができるというものが別物であるということである・・・(省略)・・・対処方法として、一緒に踊る人たちとの信頼関係や、踊りやすい環境(ふんいき)を作る事などが良い・・・ダンスの技術だけでなく、環境(ふ

んいき)や踊る楽しさ、などを教える側が意識して指導しているべきであると考えた。

指導において、生徒にわかりやすく伝えることの難しさを感じた。ソーシャルディスタンスを気にして、人とふれ合ったり、近くで話したり、ダンスにおいて重要な表情が見られないため、生徒が分かっているか、また分かっていた時に自分が踊って見せたり、口で説明するしかないで、そこが難しいのではないかと思った・・・(省略)・・・自分が指導者になった時には、生徒に分かりやすいようにゆっくりのスピードからその人のペースに合わせてお手本を見せたり、口で説明したりしたい。また、本当に分かっているかどうか、よりよいダンスをするために、客観的に見る機会を設けたいと思った。

手拍子をしていたことで、リズム感やテンポで助けられ、音楽に合わせてダンスをすることができた・・・(省略)・・・物や音に自分を映し出して独自の表現をしていて、自分と他人の動きや表現の違いを相対的に見れ、小学生の「メタ認知」を助長する、表現による「対話的な学び」ができると考えた。

(3) 特別支援学校における学習内容・展開

初等体育Ⅱの指導実践を踏まえ、特別支援学校生徒のレディネスを高め、十分な楽しさが満喫できる学習内容と展開方法について検討し、学習内容・活動、指導上の留意点について指導案を作成した(表1)。

実際の授業では、初等体育Ⅱの担当教員がまず挨拶・ウォーミングアップ・グループ分けまでを行い、大学で創作したチアダンスをIRがデモンストレーションして生徒に見せた。(写真1・写真2・写真3)



写真1 学部生によるダンス指導



写真2 グループ学習の様子



写真3 授業終了後の集合写真

(4) 特別支援学校生徒の振り返り

特別支援学校生徒の気づきと感想について、自由記述の結果を示す(表2)。内容について分類した結果、「楽しさ」「交流・継続意図」「困難さ」「達成感」「内容評価」等に分類された。

(5) 特別支援学校教員の振り返り

特別支援学校教員の気づきと感想について、自由記述の結果を示す。(一部抜粋)

楽しく踊ることができました。自然と身体が動く活動は素敵だと思います。参考にさせていただきます。

とても楽しかったです。ポンポンがまさにチアダンという感じだったので、子どもたちもノリノリで踊っていたと思います。今日はどうもありがとうございました。お世話になりました。

このような大学生との交流があると、学生さんにとってもうちの生徒にとってもとても教育的な効果があるのではないかと思います。楽しい時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。ぜひ続けて下さるとありがたいです!

ダンスみんな楽しんでいました。少しはずかしがる生徒もいるので、もっと明るく楽しい雰囲気をつくっていけば、もっともっと参加しやすくなるかと思いました。おたがい呼びやすいように、胸に名前(テープに書いてはるとか)があると交流しやすいかもしれません。ありがとうございました。

表2 特別支援学校生徒の振り返り

カテゴリー	男 子	女 子
楽しさ	たのしかったです（1年） たのしかったです。たくさんほめた大学生のみなさん ありがとうございました（1年） チアダンスを先生と2人でしました。たのしかったです（1年/教員代筆） ダンスがとても楽しかった。ありがとうございました。 またやりたいです（2年） たのしかったです（2年） たのしかったです。ありがとうございました（2年）	ダンスが楽しかったです。ありがとうございました（1年） だんすがたのしかったです。ありがとうございました（1年） ボンボンでおどれて、たのしかったです。チアダンみたいでした またやりたいです（1年） 覚えやすいダンスで生徒も楽しくおどっていました。ダンスの指導ありがとうございました（2年/教員代筆） 楽しかったです。つぎはもっとおどりたいです。かんべきにおどれました（3年） 今日は、ダンスをしました。またやりたいです。ダンス楽しかったです ほんとありがとうございました（3年） 音楽が流れていて、うれしいのが走りまわっていました バランスボールの上ではねるのが好きです（3年/教員代筆）
交流・継続意図	マスクがいろいろでふくがみどりの大学生が好きです。またダンスしたいです バスケとうですもうもしたいです。大好きです♡（2年） また来てください。笑笑がいっしょにまたしたいな（3年） おつかれ様でした（2年）	三学期もやりたい（3年）
困難さ	ダンスむずかしかったです かんたんなダンスがしたいです（1年） おもしろくなかった。よくわからなかった（2年） 曲がいややった。パブリカがいいです（3年）	
達成感		ダンス上手にできて良かったです！◎（2年）
内容評価	チアダンス結構楽しかったです（1年）	

(6) フォーカスグループインタビュー

生徒との関わりにおける学びや授業評価等について、自らの準備性（レディネス）に関する気づきや、洞察が明らかになった。

学生同士の指導と違うので最初はどうすればいいのかわからなかったけど、なんとかできたと思う。・・・(省略)・・・難しかったけれど、やって良かった。貴重な体験で、無事に終わったのでほっとした。

(笑顔で) もうたいへんでした。・・・(省略)・・・夢中でしたが、ちゃんと伝わったか心配でしたが、音楽がかかってみんなノリノリに見えたから一緒に動けました。先生方のサポートがあって安心しました。

IV. 考察

本研究では、知的障害のある子どもを想定した学生のチアダンス指導実践を分析し、共生社会の実現に向けた大学体育の身体教育について再考することを目的とした。その結果、以下の点が明らかになった。

まず、学生・生徒間において、指導における「ノンバーバルコミュニケーション」の重要性が示唆され、子どもとの信頼関係やラポール形成に触れる言説がいくつかみられた。ダンス・表現は、自らの舞踊表現のみならず、指導実践においてもノンバーバル（非言語）コミュニケーションの側面を含めることが原則である。すなわち、動きを口

頭で指示するのみならず、指導者自身の身体と表情を用いて伝達する必要がある。この点は他の教科教育と異質な点であり、ダンス・表現を教材とする場合において、教員や指導者の苦手意識を誘発しやすい側面になり得ると考えられる。特に、知的障害を持つ子どもを対象とした場合や、マスク着用の上で行うダンス・表現では口頭の指示が適切に伝わらない場合も多く、他の教科にない準備と工夫が必要となる。今回、IR は生徒と初対面であり、事前にラポール形成が行われていなかったことも影響があった要因であると推察される。特別支援学校における受け持ち児とのラポールの形成は、健康観察にも有益である点が示唆されている（野田ら、2019）。常行ら（2021）が実践している観察学習を含めた事前の教育活動を行い、親密さや信頼関係の構築、さらに授業を展開する上での楽しさや遊び、雰囲気づくりを行うことがインクルーシブな学習を効果的に進める上で有用と考えられる。

次に、ダンス指導において、既に学習した他の教科と共通する横断的な学習経験が生かされていることが明らかになった。自らの認知（考える・感じる・判断する等）を認知する、といったメタ認知に関する気づきや、客観的かつ俯瞰的な視点が、ダンスの指導実践において学生自身が意識していたことは、大学の教員養成における教科横断的な学習の重要性を改めて示唆している。わが国の政策における方向性として、障害児・生徒をささえる人材育成や場の充実、教員養成を始めとする高等教育機関において必

要性を増す可能性は極めて高い (Isogaki, 2017)。特別支援教育に直接的な関わりが少ない他校種や教科を志望する学生にも、障害児・者への深い知識と理解、協働的な学習機会を設け、障害の有無といった異質性だけでなく、同質性にも目を向けさせることのできるインクルーシブ教育が求められよう。

最後に、特別支援学校による評価から、一定の教育成果が示されたと同時に、指導と事前準備、さらに雰囲気づくりに関する今後の課題が提示された。今回は、言語的コミュニケーションが特に困難な支援学校生徒には、特別支援学校の教員が個別に付き添い、動作の習得や他者との関わりをサポートする環境があったことから、学生の安心感が示されている。今回、指導法を学習した学生はすべて1年生であり、教育に関する知見は少なく、ダンス・表現がほぼ未経験であったこと等も指導の難しさや困難さみられた要因であると推察される。常行ら (2021) は、特別支援学校生徒と学生の二者間コミュニケーションではなく、教員を含めた三者状況における学習成果と学習の支援モデルを提唱している。特別支援学校教員との連携体制は、障害のある子どもと学生を対象とした身体教育を進める上で必要不可欠と思われるが、指導実践を通じたこれまでにない挑戦的な学習活動も同様に重要であろう。学内でなされる身体教育と、障害のある子どもを実際に指導する現場での活動が双方向のサイクルで循環することが望ましいものと推察される。

本研究は、高知大学教育学部附属特別支援学校における限定的なケーススタディであることから、公立学校等への一般化には限界がある。サンプル数も十分でないことから自由記述の解釈や比較には注意が必要となろう。しかしながら、共生社会の実現に向け、医療体育の側面だけでなく、障害のある子どもと障害のない子ども、さらに未来の教員養成がインクルーシブな環境において、新たな大学体育の身体教育が推進される必要性はあろう。また、オンラインを通じて障害児・者の身体活動を支援することも、今後の課題と思われる。

V. まとめ

本研究では、知的障害のある子どもを想定した学生のチアダンス指導を分析し、共生社会の実現に向けた大学体育の身体教育について再考した。学生の気づきと特別支援学校生徒・教員及びフォーカルグループインタビューによる質的データを踏まえた結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 学生・生徒間において、指導における「ノンバーバルコミュニケーション」の重要性が示唆され、技術スキル以外にも、子どもとの信頼関係やラポール形成に触れる言説が示された。
- 2) ダンス指導においてメタ認知に関する気づきや客

観的かつ俯瞰的な視点がみられ、教科横断的な学習の重要性が示唆された。

- 3) 特別支援学校による評価から、一定の教育成果が示されたと同時に、指導と事前準備、さらに雰囲気づくり等の課題が提示された。

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育は、教科横断的な学習に加え、障害のある子どもと障害のない子ども、さらに教員志望学生・教員による組織としての教育活動の有効性が期待できる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K11600 の助成を受けた。また、授業研究にご協力いただきました高知大学教育学部附属特別支援学校の先生方に心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Creswell W. J.(2003) Research Design Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods, Approaches Second Edition. Thousand Oaks : Sage Publication.
- Isogaki K.(2017) Recent Developments in Japan's Special Needs Education – Promoting an Inclusive Education System –. NISE Bulletin. 16. file:///C:/Users/YQG04/Downloads/07Recent_Policy_and_Status.pdf (2020年11月30日閲覧)
- 川嶋太津夫 (2008) ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆. 名古屋高等教育研究. 8, pp.173-191.
- 高知大学教育学部附属特別支援学校 (2021) ホームページ <http://www.kochi-u.ac.jp/tokushi/overview/index.html#kotoubu> (2021年11月23日閲覧)
- 松田恵示 (2019) 「遊び」から考える体育の学習指導. 創文企画. 東京.
- 文部科学省 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325884.htm (2021年11月21日閲覧)
- 文部科学省 (2012) 中央教育審議会初等中等教育分科会資料 1 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325881.htm (2020年11月30日閲覧)
- 文部科学省 (2019) 初等中等教育局特別支援教育課 平成30年度特別支援学校教員の特別支援学校教諭等免許

状保有状況等調査結果の概要.

https://www.mext.go.jp/content/1414910_01.pdf

(2020年11月30日閲覧)

NHK Web (2021) 2021年9月1日報道

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210901/k10013238051000.html> (2021年11月22日閲覧)

野田智子・鎌田尚子 (2019) 肢体不自由特別支援学校担任教諭における児童生徒の健康状態の認識状況 (第二報). 埼玉医科大学看護学科紀要, 12(1), pp.9-16.

清水茂幸・湯沢幸己 (2017) 特別支援学校における健康づくりに関する研究. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集. 4, pp.70-73.

スポーツ庁 (2016) 文部科学省障害者スポーツ推進タスクフォース.

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop06/list/detail/1379526.htm (2021年11月23日閲覧)

スポーツ庁 (2017) スポーツ基本計画.

https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002_300000714.pdf (2020年11月30日閲覧)

竹林地毅編 (2006) 障害のある子どものための表現活動. 東洋館出版社, 東京.

常行泰子・坂井香代・野中陽一朗 (2021) 特別支援学校の知的障害生徒を対象とした個別トレーニングによる保健体育の授業実践. 高知大学学校教育研究. 3, pp.173-179.

山口遼・橋本創一・霜田浩信・邊貴裕・熊谷亮・菅野敦・大伴潔・林安紀子・池田一成・小林巖・丹野哲也・杉岡千宏・李受眞 (2019) 知的障害特別支援教育の個に応じた授業づくりに関する全国調査ー特別支援学校・特別支援学級における自ら学ぶ姿を育成する授業展開の検討ー. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ. 70, pp.135-142.